

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 藤野寛著『友情の哲学  
緩いつながりの思想』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 濱岡, 剛, Hamaoka, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000442">https://doi.org/10.57529/00000442</a>

〔書評〕

藤野寛著

『友情の哲学 緩いつながりの思想』

濱岡 剛

本書は、人と人とのつながりの形態が様々あるなかで、現代社会において注目すべき、「絆」と呼ばれるような強い人間関係ではない「緩いつながり」であると見定めて、それを「友情」というキーワードで論じようとする試みだと言えよう。そのような課題設定ゆえに、友情が生み出す人間関係が議論の中心となり、「友情」の「情」の側面、各個人の心理的・感情的な側面の分析については手薄になってしまったように感じられる。

「愛」とか「友情」といった言葉はありふれた言葉で、様々な場面で用いられるが、それだけにその内実を確定させるのは難しい。同様の問題を示すものとして、「『有る』は多様な仕方

で語られる」というアリストテレスの有名な言葉がある。「『有る』という言葉はあまりに一般的な語であり、その意味を一義的に確定することは難しく、強引にそれをやっても得るところは少ない。そこでアリストテレスは、「『有る』は」一つのもの、ある一つの自然本性との関係において、同名異義的でなく語られる<sup>(1)</sup>という「帰一的な (Prosaic) 関係」に着目し、その「一つのもの」が何であるかを論じる。オーウェンはそれを「帰一的意味」(focal meaning) と名付けたが、帰一的意味を論じることは、当該のものとそうでないものとの線引きではない。周辺的と見なされるような用法でも切り捨てるのではなく、逆に何故そのような言い方がなされるのかを明らかにすることになる。このやり方は形而上学だけのことではなく、「ニコマコス倫理学」では「善い」を論じる中で、そして『エウデモス倫理学』ではフィリア (philia) 論の中で言及される。後者では次のように説明されている。「(フィリアは) ある一つの、第一なるものとの関係で、さまざまに語られるのである。ちょうど『医療的』という語のように。つまりわれわれは、心も身体も器具も成果も総じて『医療的』と呼ぶが、主要な意味で呼ばれるのは、このうちで『第一義的なもの』である<sup>(2)</sup>」。アリストテレスはフィリアを論じる中で友情の構成要素を列挙するが、

それをもつてして「友情と友情ならざるものとの間にきちんと境界線が引かれる」(C.5)とまで断言するのは控えたほうがいいだろう。現実の事象では境界線は「緩い」のであって、きっぱりと線引きするのは困難である。アリストテレスのフィリアの説明、特に「徳ゆえのフィリア」の説明には理想主義的な語りとも見えるところがあるが、理想型を持ち出しても、そのことによつてそれ以外のものを擬似的なものとしておとしめるのではなく、その理想型を手がかりとしてフィリアの多様性を捉えようとしているのであって、その点では現実的なアプローチと言えよう。プラトンのイデア論についても、イデアという理想型が語られるからといって、偏狭な理想主義とみる必要はない。この現実世界にはそもそもイデアをそのまま実現しているようなものはない、という認識が前提としてあることを考えるならば、イデア論を現実から遊離した理論とみるのは適当ではない。

では、藤野氏は「友情」をどのように論じるのか。C. I. ルイスの<sup>(4)</sup>ように、Loveを四つの類型に分け、その一つとしてfriendshipを論じるというやり方もあるが、藤野氏はむしろ愛と友情とを区別する。「愛との区別というのは友情論にとつて常に避けられない課題となる」(D.15)。しかし、「愛」には「博

愛」「隣人愛」「恋愛」……とさまざまなあり、それらを同様に扱うのは混乱の元になりかねないから議論の中で一定の限定をつけるのは妥当な処置だが、藤野氏のやり方はかなり大胆である。まず「博愛」であるが、「『承認』の哲学」を参照にすれば(これはPhilanthropieではなくBrüderlichkeitに対応するもの)ようである。フランス革命の標語(Liberté, Égalité, Fraternité)の中の「友愛」である<sup>(5)</sup>。字義通りには「兄弟愛」であるから、必ずしも「すべての人を分け隔てなく愛する」ということにはならない。フランス共和国憲法でも言及された他の二つの語と比べて「友愛」の意味は不明確だが、いわば「人類皆兄弟」と表現されるような理想をそれに読み取るとするならば、それは「人類愛」という愛の形につながる。<sup>(6)</sup>『日本国語大辞典』では「兄弟・友人の間の親しみ。また、他人に対して深い思いやりをもつさま。」という説明が挙げられているものの、アリストテレスのフィリアを「友愛」と訳す背後にはフィリアを「博愛(神の愛)」の方向に解釈しようとする傾向を顕著に示す<sup>(7)</sup>。

(C.20) ものがあると藤野氏はコメントする。カントは「愛」を「傾向性としての愛」と「実践的な愛」とに区別し、後者を義務概念にもつながらるものとして評価した<sup>(7)</sup>。対して藤野氏は「博愛」と「恋愛」を対比させ、両者は「実質

的には正反対の心の働きである」とし、自らの承認論の枠組みから「恋愛」のほうを重要視する。つまり、「唯一一人の人だけを愛する」(p.16)という愛を考える。もともと、「愛」の対象は多様であり、「すべての人」か「唯一一人」かのいずれかだけでなく、「家族」「同胞」「卒業生」など様々な集団の間で「愛」が語られる(「友情」と違って、人間以外のものに対する「愛」も語られるので話はややこしい)。ネハマスが「なぜ私たちは友を愛する (love) のか」と問うように、友に向けられた「肯定的評価に基づく濃厚な感情」(p.15)を「愛」と表現することもありうる。そうした「愛」の多義性を考慮するならば「恋」という語で論じたほうが友情と「愛」との区別のポイントが分かりやすくなったのではないかと感じられたのだが、それでは気がすまないところがあるのだろう。また、「友情は、唯一の愛と博愛の間どこかに位置する」(p.109)という指摘は、愛には「唯一の愛」(恋)か「博愛」かという両極端のいずれかしかないかのような想定を示唆する。読者は、この書において「愛」と言われている場合にはそのいずれかであり、中間的なものは考えられていないと割り切つて読むと混乱せずに議論を追っていくことができるだろう。あえてきわめて乱暴な図式化をしてみると、对人的な肯定的評価に基づく感情のうち、一人

だけを対象とするなら「(恋)愛」、万人を対象とするなら「博愛」、一人でも万人でもない複数の人を対象とするのが「友愛」、ということになる。

恋愛タイプの愛については「人を選ぶ」という点が強調され、「依怙蟲貞としての承認」(p.15)とも呼ぶ。確かにその通りであろう。ただ、「依怙蟲貞」は誰かを恋することから派生してくる事象であつて、恋愛そのものを説明するものではない。愛という感情がいったいどのようなものか、それと対比して友情という感情がどのようなものが深く掘り下げられず、その感情から成立する「人間関係」の考察に力点が置かれているように見える(実際、第Ⅱ部では「友達関係」という表現が多用される)。また、「依怙蟲貞」と言えば、近年では総理大臣が「腹心の友人」を依怙蟲貞したのではないかとという疑惑が世間をさわがしているように、依怙蟲貞は恋愛に限ったものではない。恋愛と友情との区分を可能にする、愛の内実に踏み込んだ考察があつてもよかつたのではない。

そして、友情の考察のために藤野氏が持ち出すのがアリストテレスのフィリア論である。フィリアの訳語をどうするかは悩ましいところである。古代ギリシアの通俗的な正義概念として挙げられる「友を利し敵を害する」での「友」は、敵に対する

「味方」くらの意味であり、われわれが「友人」ということで考える親密な間柄に限定されない外延の広い概念であることがしばしば指摘されているところである。藤野氏もフィリアが「友情」という（今日の）日本語と意味内容がぴったりと一致しないらしいと推測する。そして、訳語の選択の問題は「友情」を取り上げる上での根本姿勢に関わる問題である（p.22）とする。ただ、アリストテレスの議論を追って、アリストテレスの「議論の全体が『友情』に当てはまるものではないこと」を確認するが、それがどのように「根本姿勢」につながるのか分かりづらい。「アリストテレスの思考は理想主義に流れない」（p.23）という点が「根本姿勢」ということなのかもしれないが、それはアリストテレスがどのようなスタンスで論じているかということであつて、フィリアの訳語についての問題につながることはないように思われ、議論の進む先が見えにくくなっている。

アリストテレスはフィリアを論じるとき、それがつねに誰かに向けられた性向 (hexis) ないし感情 (pathos) である点から、その本質を知るためには「愛されるもの (philetion)」に目を向けることが有用だと判断し、その分析の結果として三種類のフィリアを抽出することとなる。<sup>(13)</sup> すなわち「徳」「快さ」

「有用さ」ゆえのフィリアである。ここで「徳」が持ち出されるのは現代のわれわれからすると違和感が感じられて当然だろう。確かにアリストテレスの議論は理想的な「善き人」の間の友情について語っているのだが、徳ゆえのフィリアをモラリスト的でない仕方でも読み替えることも可能ではないか。「徳」と訳される *areté* が、近代における「道徳性」*morality* よりもずっと広い領域をカバーする概念であることはよく知られている。

さらに、徳としてさまざまな徳目を挙げられるが、ソクラテス、プラトンの倫理学では徳の全一性——「勇氣はあるけれども節制はない」というような、特定の徳だけが人に備わることとはないということ——が強調されるが、その点についてアリストテレスは縛りが緩い。全一的な徳でなくとも、何らかの個別的な徳が備わっているがゆえにある人物を友として愛するということ、有用性や快樂とは無関係に、何らかのある美点ゆえにある人を友として愛するというような状況を想定しても、<sup>(14)</sup> アリストテレスの規定から大きくはずれるものではないだろうし、現実のある一面を説明していると言えるだろう。

本書第2章では、友達の必要性を論じる『ニコマコス倫理学』第9巻第9章の議論の検討を通じて「自足」という概念を取り上げ、そこからさらに第3章で「友達を必要とするのは弱い人

か」と論じる。第3章では、「自足」から「自立」、そして「自律」へと話が進んで、いつの間にか話題はアリストテレスからカントへ移っていく。本書では扱われなかった『ニコマコス倫理学』第9巻第9章の後半では、「もう一人の自己」という言い回しが出て来る。いかにも理想主義的な友情論ということを取り上げなかったのかも知れないが、ここでは友を通じて自己を見る、という関係が語られている。テキスト解釈上さまざまな議論が為されているやっかいな箇所ではあるが、承認論の枠組みから見ても興味深い論点を提供しているように思われるだけに、そこまで議論を進めないうちにカントに話題を移されたのは残念である。

さて、藤野氏が論じる「緩いつながり」は、我々が現代社会を生き抜く上でそうしたつながりにどこまで期待できるのかわからないが、現代を語る上で重要な視点を提供しているのは間違いない。ただ、その「緩いつながり」を「友情」という言葉で表現するのが適切であったのか、やはり疑問を感じる。個人の語感に頼つてのことだが、たとえば子供に「たくさん友達を作りましょう」と言うような場合には、やや親しい知り合いという程度の「交友」を作りましょうと言っているにすぎない

と感ずるのだが、「友情」と言われるとちょっと限定された特別な関係が意味されているように感じる。つまり、もっと親密なつながり、「親友」「莫逆の友」「盟友」という言葉が当てはまるような濃密な関係を思い描く。実際、「友情で結ばれた関係」は少数の（あるいは唯一の）人との間で育まれるもののように感じる。こうしたことを考えると、「緩いつながり」を示すために「友情」という語を使うのはかえって混乱させることになり、プロクルステスの強引さでなんとか整合性を保っているように見えなくもない。結果的に、新しい酒を古い革袋に盛ることになったのではないだろうか。

（四六判、二〇〇頁、作品社、二〇一八年四月発行、一八〇〇円＋税）

注

- (1) 『形而上学』Γ巻（第四巻）第二章1003a33-34.
- (2) G.E.L.Owen, "Logic and Metaphysics in some Earlier Works of Aristotle", in L. Düring and G.E.L.Owen, *Aristotle and Plato in the Mid-fourth Century* (Göteborg, 1960).
- (3) 『エウデモス倫理学』（荻野弘之訳）第七巻第一章1236a17-20.
- (4) CS.ルイス『四つの愛 (The Four Loves)』（佐柳文男訳）新教出版社。

- ちなみに、この訳書では『friendship』は「友愛」と訳されている。
- (5) 『ロイヤル仏和辞典』『クラウン仏和辞典』による。
- (6) 『博愛』に対応するような考え方は、アリストテレスを含め古典期にはなかったと考えられている。隣人愛を訴えたイエスの登場が決定的な転機であろうが、思想的に考察するならば、ヘレニズム期のストア派も考慮にいれる必要がある。
- (7) カント『人倫の形而上学の基礎づけ』A399。
- (8) A. Nehamas, *On Friendship* (2016, New York) 第4章の副題。
- (9) 『愛』love, Liebe-愛 違ひつ『友情』friendship, Freundschaft にはそれぞれに対応する単一の動詞がない(もともと、Nehamas, p4によれば、Facebookのせいでfriendが動詞として用いられるようになったらしい)。アリストテレスはフィリアの他に、philein (形容詞の中性形…愛されるもの)・philein (動詞…愛する)・phileōs (名詞…愛すること)のような語を駆使して議論を展開しており、翻訳者にはそのつながりが見えるような工夫が求められる。
- (10) YouTibeの映像からすると、「莫逆の友」と言うべきところで「バクシンの友」と言ってしまったのを、報道の際に辻褃を合わせるべく「腹心の友」と字幕を付けたのが発端ではないかと推測される。
- (11) 『新版アリストテレス全集』では、『ニコマコス倫理学』を担当した神崎繁は「友愛」、「エウデモス倫理学」を担当した荻野浩之は「愛」を主たる訳語として採用している。
- (12) 『ニコマコス倫理学』第8巻第5章1157b38-39では「フィレーシスは感情に、フィリアは性向に似ている」と言われているが、『弁論術』第2巻第4章では感情の一種としてフィリアが論じられる。
- (13) このやり方は、アリストテレスが『魂について』で感覚を論じる方法と同様である。
- (14) Cf. Nehamas, p25.
- (15) 少人数とそうしたつながりをもっている、というのでは実に心許ないので、上野千鶴子のいう「友人のネットワーク」(p.109)が形成される必要があるのだから、そのネットワークはどのようなもので、どのようにして形成されるかがさらに考察を進めるべき課題であろう。